

1 プログラムの背景

(1) 「学習指導要領」とのつながり

学校で学んだことが、子供たちの「生きる力」となって、明日に、そしてその先の人生につながってほしい。

これからの中が、どんなに変化して予測困難になっても、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれの思い描く幸せを実現してほしい。

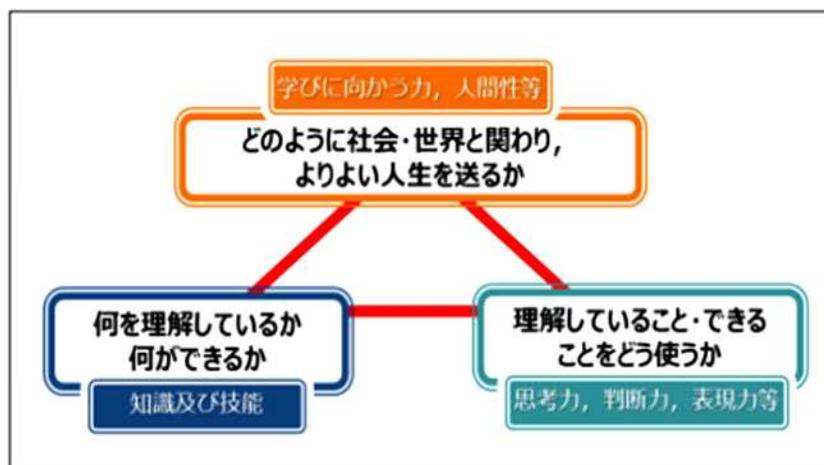
そして、明るい未来を、共に創っていきたい。

【文部科学省HPより】

「学習指導要領」には、こうした願いが込められています。そして、これらを実現する上で子供たちに必要な力を、3つの柱（図1）に整理しています。

そのような中で、これからの中の変化の激しい時代に必要となる資質・能力の1つとして、「学びに向かう力、人間性等」が明確に示されました。

本プログラムの取組は、この「学びに向かう力、人間性等」にアプローチするものです。全ての子供たちのウェルビーイング実現をサポートします。



【図1 出典：国立教育政策研究所 令和2年3月】

(2) ウェルビーイングについて

社会的、経済的、環境的に前例のない課題に直面し、予測困難な未来が到来しようとしています。こうした予測困難で不確実、複雑で曖昧な時代（VUCA）

【※1 p. 13】を生き抜くために必要な力を、子供たちに付けていくことが求められます。

OECD（経済協力開発機構）（以下「OECD」という。）【※2 p. 13】は、こうした時代の変化において、単純な経済的成長だけでなく、包括的な成長を目

指すため、様々な取組を行っています。その取組の一つとして OECD は「わたしたちが実現したい未来 (The Future We Want)」【※3 p.13】において、社会としてのウェルビーイングを共有すべきゴールとして示しました。人々が心身共に、そして社会的に持続可能で幸せな状態を目標としています。

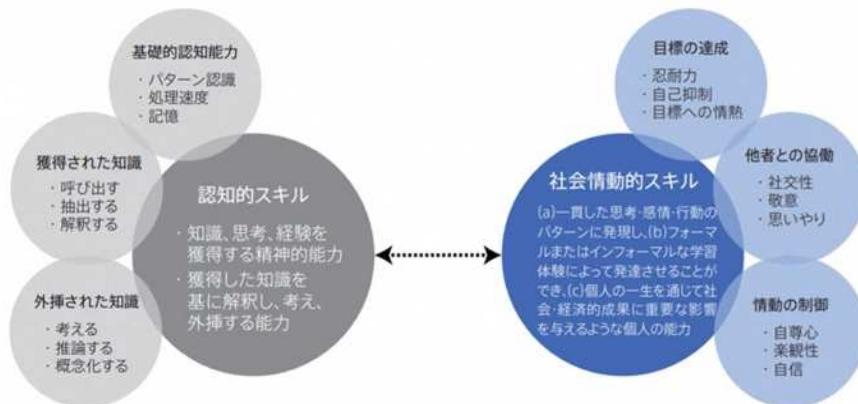
厚生労働省では、ウェルビーイングを「個人の権利や自己実現が保障され、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあることを意味する概念」と示しています。これは、個人としての概念だけでなく、社会としての概念でもあります。

ウェルビーイングと生徒指導との関連について目を向けてみると、令和4年12月に改訂された生徒指導提要では、「生徒指導は、児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支えると同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えることを目的とする。」と示されています。「自己の幸福追求」と「社会に受け入れられる自己実現」を支えるという点において生徒指導の目的とウェルビーイングの概念とは関連があると考えられます。

ウェルビーイングな未来を作り上げるために、OECD は、子供たちに必要なスキルの一つとして、「社会情動的スキル (Social and Emotional Skills)」を挙げています。

(3) 社会情動的スキルについて

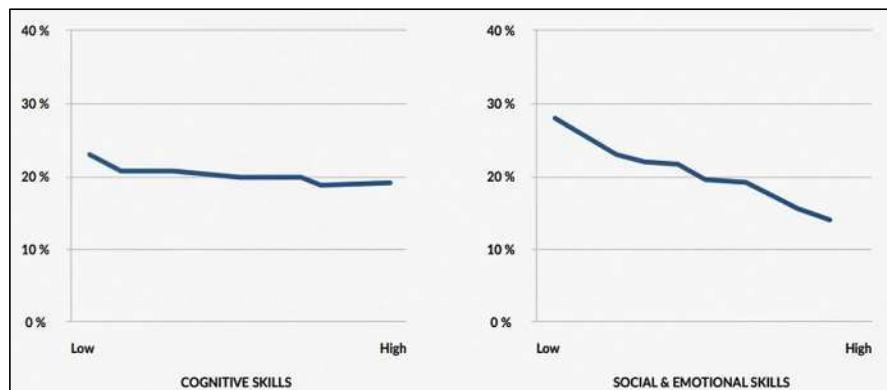
「社会情動的スキル」とは、自分の思考、感情、行動等を調整する能力を指します。読み書きや計算などに係る知識を得たり概念化したりすることなどが含まれる認知的スキルとは異なり、感情をコントロールしたり、自分自身を知ったり、他の人とどのように関わるべきかを知ったりする力です(図2)。認知的スキルと同様に、学ぶことを通して成長します。



【図2 出典：国立教育政策研究所 平成29年4月】

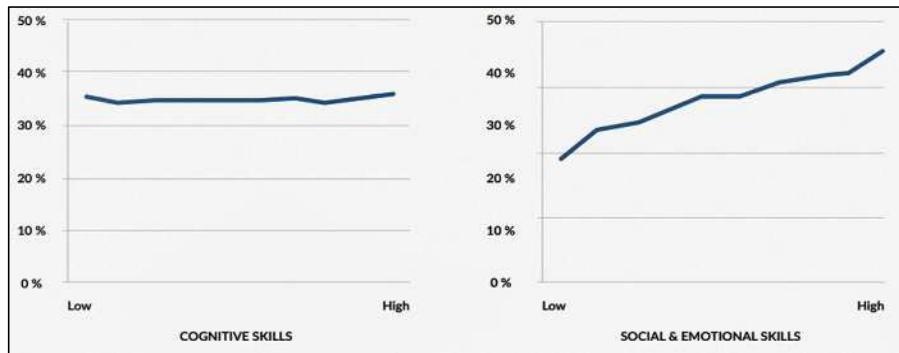
社会情動的スキルは、予測困難で不確実、複雑で曖昧な時代において非常に重要な能力であり、個人の成長や成功に大きく影響を与えると言われています。共感力、コミュニケーション能力、協力性、リーダーシップ、ストレス管理能力等が含まれるこのスキルを学ぶことにより、他者との良好な関係を築き、円滑なコミュニケーションを図ることができます。

この社会情動的スキルと認知的スキルが、子供たちの行動上の問題やウェルビーイングにどのように関連しているかが明らかになっています。図3と図4は、OECDが行った調査結果です。まず図3は、8歳時点のスキル（認知的スキルおよび社会情動的スキル）と、16歳時点での行動上の問題の発生率（縦軸%）との関連を示しています。認知的スキルはほとんど水平で、スキルが高くても行動上の問題の発生率はほぼ変わりません。一方で、社会情動的スキルは右肩下がりで、スキルが高くなるほど、行動上の問題の発生率が大きく低下しています。このことから、行動上の問題を予防するうえで、社会情動的スキルの方が認知スキルより有効であることが分かります。これは、暴力行為やいじめ等の大きな課題を解消するための糸口となります。



【図3 出典：OECD 2015】

もう一つの図4はウェルビーイングについてです。このグラフは、スキル（認知的スキルおよび社会情動的スキル）の水準（低～高）と、「とても幸せだ」と感じる可能性（縦軸%）の関係を示しています。認知的スキルはほぼ水平でスキルの高さと「幸福感」はほとんど関連がありません。一方で、社会情動的スキルは右肩上がりで、このスキルが高くなるほど、「とても幸せ」と感じる割合が増加していることがわかります。つまり、子供たちのウェルビーイングを高めていくために、子供たちの社会情動的スキルを育てていくことが非常に有効であることが分かります。



【図4 出典：OECD 2015】

OECDは社会情動的スキルを、自分自身や他者との関係を適切に築き、効果的に対処するためのスキルとしています。OECDは、社会情動的スキルを次の3つで示しています。

・目標の達成	: 忍耐力、自己抑制、目標への情熱
・他者との協働	: 社交性、敬意、思いやり
・情動の制御	: 自尊心、楽観性、自信

これらのスキルを身に付けることにより、個人の成功や幸福感に重要な役割を果たすとしています。

(4) ソーシャル・エモーショナル・ラーニング（S E L）について

ソーシャル・エモーショナル・ラーニング（S E L : Social Emotional Learning）（以下、「S E L」という。）とは、先述した社会情動的スキルを育成するための教育的アプローチやプログラムを指します。S E Lは、子供が自己理解や他者理解を深め、健全な社会生活を送るために必要なスキルを身に付けることを目的としています。人間関係を築くスキルやセルフコントロール等を学ぶことで、子供の問題行動を低減させ、幸福感情を高めるだけでなく、学習意欲等の向上にも寄与すると言われています。

CASEL (Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning)（以下「CASEL」という。）【※4 p. 13】では、社会情動的スキルを学ぶためのプログラムに、次の5つの要素を示しています。

- ・自己理解：自分の感情、思考、価値観を正確に認識し、自己理解を深める力
- ・他者理解：他者の視点を理解し、共感する力
- ・対人関係スキル：健康的な人間関係を築き、維持するための力
- ・セルフマネジメント：感情や行動をコントロールし、目標に向かって努力する力
- ・責任ある意思決定：倫理的に正しく、社会的に受け入れられ、自他にとって安全で健全な選択をする力

生徒指導提要でも、学校生活への適応やよりよい人間関係の形成、学習活動や進路等における主体的な取組や選択及び自己の生き方などに関する取組の一つとしてSEL等の実施について示されています。

また、生徒指導提要では、生徒指導の重層的支援構造として2軸3類4層構造【※5 p.14】が示されています。中でも、「発達支持的生徒指導」や「課題予防的生徒指導（課題未然防止教育）」が、これからの中等教育における生徒指導においては、より一層重要になります。「発達支持的生徒指導」は、特定の課題を意識することなく、全ての子供を対象に、学校教育の目標の実現に向けて、教育課程内外の教育活動において求められる基盤となるものです。「課題予防的生徒指導（課題未然防止教育）」は、全ての子供を対象にした生徒指導の諸課題の未然防止をねらいとし、意図的・組織的・系統的に実施する必要があります。

近年、子供の暴力行為の発生件数やいじめの認知件数、不登校児童生徒数は増加する状況が続いている。これまでどおり、困難を抱える子供への支援は継続的に行う必要がありますが、全ての子供を対象に発達を促す支援である「発達支持的生徒指導」、「課題予防的生徒指導（課題未然防止教育）」の一つとしてSELに取り組むことで、子供にとってのウェルビーイングの実現が期待されます。

2 プログラムの趣旨

(1) 本プログラムが目指すもの

静岡県は「ウェルビーイング」の視点を取り入れ、幸福度日本一を目指しています。教育の基本理念【※6 p. 15】には、「未来を切り拓く人材の育成と社会を生き抜く力を育む教育の実現」を掲げ、子供たちが個性や能力を發揮し、自分や他者を大切にする心を持って社会や人のために行動できるような教育を推進しています。

そのような中で、本プログラムは、幸福度につながる社会情動的スキルを体系的に育成することを目指します。社会情動的スキルには、様々な要素がありますが、OECD や CASEL の研究等を参考に、静岡県の児童生徒の実態に合うよう、目指すスキルを 3 つの柱に再構築しました。

(2) 本プログラムにおける社会情動的スキルの 3 つの柱

本プログラムで設定した 3 つの柱は、次のとおりです。

- ・自己理解・他者理解
- ・ここちよい人間関係
- ・セルフマネジメント

3 つの柱は、次のような内容を主なねらいとしています。

ア 自己理解・他者理解

自己理解・他者理解は、「自分や相手の気持ちを大切にできる。」ことを主なねらいとしています。子供たちへは、「自分も相手も大切に」の見出しで投げ掛けていきます。

要素としては、自分への気付き、他者への気付き、自己受容、他者受容、自尊心、自信等があげられます。

イ ここちよい人間関係

ここちよい人間関係は、「自分も相手もここちよい関係をつくることができる。」ことを主なねらいとしています。子供たちへは、「自分も相手もここちよく」の見出しで投げ掛けていきます。

要素としては、対人関係、社交性、敬意、思いやり等があげられます。

ウ セルフマネジメント

セルフマネジメントは、「自分の気持ちや行動をマネジメントできる。」ことを主なねらいとしています。子供たちへは、「自分のなりたい姿に」の見出しで投げ掛けていきます。

要素としては、自己のコントロール、責任ある意思決定、忍耐力、目標への情熱、楽観性等があげられます。

(3) カリキュラムの特徴

本プログラムのカリキュラムは、子供たちの発達段階や、教科との関連など大きく2つの特徴があります。

ア 発達段階をふまえたカリキュラムの構成

現代の子供たちの育ちの背景について、少子化による遊びの質・子供集団の変化が指摘されています。放課後に、友達と公園で集まって、自分たちでルールを考えて集団で遊ぶのではなく、オンラインゲーム上で集合して遊ぶといった遊びも出てくるようになり、その質がかなり変わってきています。また、新型コロナウイルス感染症の感染対策が厳しく、家族以外がマスクをしていたり、ソーシャル・ディスタンスが当たり前だった幼児期を過ごしたりしているなど、厳しい時期を過ごしてきました。子供たちの育ちが厳しい状況であったことからも、そこに寄り添えるカリキュラムが求められていると言えます。

そこで、それぞれの発達段階では、以下の点を考慮してカリキュラムを構成しました。

- ・小学校低学年においては、学校生活に必要なソーシャルスキルを重点的に学ぶことができるような構成としています。特に、不登校・暴力行為が低学年化し、気持ちを言葉にできない子供が増えていることから、小学校低年齢化から気持ちのコントロール（セルフマネジメント）を学ぶことができるプログラムを導入しています。
- ・小学校高学年においては、低学年からの積み上げを、小学校5年生の保健につなげられるように内容を構成しています。
- ・小学校高学年から中学校の「選択プログラム」の中には、文部科学省が示している自殺予防教育、いじめ予防教育、命の安全教育などを含めています。
- ・中学校1年時のソーシャルスキルがその後の学校適応に影響しているという研究結果（藤原ら、2022）に基づいて、中学校で必要なソーシャルスキルを中学校1年で確認するカリキュラム構成としています。

イ 教科や特別活動との関連

本プログラムは、学習指導要領と関連付けています。学習指導要領においては、社会情動的スキルの育成につながる部分が多くあります。子供たちの学びは、相互に関連し合い、複合的に育まれていくものであり、各教

科等との関わりを本プログラム構成に反映し、教科内容等と連携して行うことができるよう配慮してあります。

プログラム実施にあたっては、各学年4時間実施することを想定しており、3～4つの推奨プログラムと小学1年～3年、小学4年～6年、中学1年～3年の3区分ごとに4～6つの選択プログラムを用意しています。学校の実態に応じて、適切な時期に実践することにより、本プログラムが目指す社会情動的スキルを身に付けていくことが期待できます。

16～19ページの一覧表では、各学年におけるプログラムの実施時期の目安を示しています。あくまで目安なので各学校の実態に合わせて実施時期を計画してください。

また、本プログラムの実践をきっかけとして、各教科等の授業や日々の学校生活の中など学校生活全般に「自己理解・他者理解」、「ここちよい人間関係」、「セルフマネジメント」の考えを広げていくことで社会情動的スキルがより育まれていきます。

(4) 校内体制の位置付け

ア 生徒指導主事・主任をリーダーとした運用

本プログラム実施にあたっては、各校の生徒指導主事・主任がリーダーとなり取り組んでいただくことを想定しています。本プログラム実施のための年間計画の作成にあたっては、特別活動主任等と連携し、各学年で適切に実施されるよう、学校全体へのサポートをお願いします。特別活動とSELの内容を組み合わせることで、プログラムで学んだことを生かす機会になります。

イ チームによる実施

本プログラム実施にあたっては、学級担任等だけでなく、必要に応じて養護教諭、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等と連携して取り組むことが想定されます。プログラムの内容によっては学級担任と養護教諭等が役割分担をしながら授業を進めたり、子供の振り返りで気になる記述がある場合はスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等につなげたりするなど、チームとして学校全体で取組を進めることができます。

3 プログラムを実施する上での留意点

授業者が、必要性を感じながら楽しんで授業を進めることで、子供たちもより主体的に授業に取り組み、SEL実施の効果が期待できます。

(1) 授業の準備

各プログラムで使用するワークシートや資料等は、各プログラムの指導案の後に掲載しています。必要枚数分を印刷したり、1人1台端末で活用したりしてください。授業をより良く進めるためのポイントを挙げます。

【心構え】

✓ 授業者が興味を持つ

授業者が興味を持って授業を行ってください。授業者が興味を持てないまま授業を行うと、子供たちもネガティブな反応になります。

✓ 授業者が必要だと思う

授業者が「これはこの子たちに必要なことだ」と思い授業をすると、内容が伝わっていきます。

✓ 授業者が楽しむ

授業者が楽しんで授業を行うと、子供たちもワクワクして取り組み、主体的に学ぶ姿が期待できます。

【環境づくり】

✓ 子供の実態を捉えて、環境を整える

子供や集団の実態を踏まえながら、学びの環境を整えることで、子供の自己への気づきが促されます。

(例) グループやペアを作る際、自己表現がゆっくりな子、集団の中で弱い立場の子などは、安心して表現できる友達とグループやペアにすることで、友達や先生から認められる体験につなげることができます。

自己理解を促したい子には、対人関係のバランスが取れている子や、コミュニケーションで一目置かれている子と一緒にグループにすると、話合いの中で、自分への気づきが生まれやすくなります。

(2) 授業の導入

ア プログラムを実施する上でのSELの約束を確認します。

SELの約束

- ・ひやかしたり、からかったりしないようにしよう
- ・自分や友達の考えを大切にしよう
- ・困ったことがあったら先生に相談しよう

分や相手の考えを大切にすること（プライバシーを守ること）、困ったことがあつたら先生に相談することを毎時間確認します。

イ プログラムを実施する目的を明確に示します。
社会情動的スキルの「3つの柱」を示し、確認します。

本プログラムにおける社会情動的スキルの「3つの柱」

- ・自己理解・他者理解 「自分も相手も大切に」
- ・ここちよい人間関係 「自分も相手もここちよく」
- ・セルフマネジメント 「自分のなりたい姿に」

（例）「今回の授業では、自分や相手の気持ちを大切にできるよう、「自分も相手も大切に」について取り組みます。」

「今回の授業では、自分も相手もここちよい関係をつくることができるよう、「自分も相手もここちよく」について取り組みます。」

「今回の授業では、自分の気持ちや行動をうまくマネジメント（コントロール）できるよう、「自分のなりたい姿に」について取り組みます。」

ウ 小中9年間で系統的に行えるよう、プログラム実施後のワークシートや振り返り等をファイリングしたり、データ保存したりすることをおすすめします。

（3）授業中

授業者も状況に応じて活動等に参加することが考えられます。

ペアやグループで行う活動の場合、安心できる友達と同じグループにするといった意図的なペアやグループを構成する等、学級や子供の実態に応じて必要な配慮をしてください。

配慮が必要な子供がいる場合は、授業者が声掛けをする等のサポートをするようにしてください。もし机にふせてしまったり、「面白くない」と声をあげたりするなどして活動等への参加が難しい場合は、強制はしないでください。こうした子供の行動の背景には、これまでの人間関係での傷つき等があり、不安や自信のなさを感じている可能性があります。そのため、こうした子供へは、その行動に至った思いや気持ちを受け止め、必要に応じて、個別で話を聴くなど、養護教諭やスクールカウンセラー等を交えたチームで対応することも考えられます。

(4) 授業終了時の振り返り

授業の終了時に、「振り返り」を行います。子供が自分の気持ちや行動を客観的に見つめ直したり、学んだことをこれから的生活に役立てようしたりする上で、「振り返り」は重要となりますので、時間の確保をしてください。

「振り返りシート」では、「自分のこととして取り組みましたか。」「自分や友達の考えを大切にしましたか。」「この授業で大切にしたいことやこれからの生活に役立てたいこと」等の振り返りをします。

子供たちの発言や回答を受容することが大切です。

子供たちの「振り返りシート」への記述で気になるものがある場合は、スクールカウンセラーへ情報共有したり、また必要に応じて授業についての助言をもらったりするなどの対応も考えられます。

(5) 日常生活での関わり

授業を1回受けただけでは、大人でもなかなか生活の中で活かすことにつながりにくいものです。そのため、授業で行った内容を掲示物にしておく、「チャレンジシート」として日常生活で使ってみるような宿題（ワーク）を出してみる、授業の内容を活かせそうな場面で「○○の授業の内容で考えみようか」「○○の授業で行ったことをやってみよう」など、授業内容と生活場面が結びつくような声掛けをするとよいでしょう。子供たちができた時に、先生方がたくさん褒めたり認めたりすることで、子供たちの自己肯定感が高まっていきます。

4 プログラム指導案の見方

各プログラムの「4 展開」の「学習活動」の欄には、活動等にかかる所要時間の目安を【□分間】という形で掲載しています。

「留意点」の欄には、各プログラム実施において気を付けることやおさえること等を〔○印〕、各プログラム実施において目的にせまったときに表れる子供の姿を〔◇印〕で記載しております。

16ページの学年別一覧表では、「タイトル」、「実施時期」等がひと目で分かるように記載しています。

17～19ページの系統一覧表では、「タイトル」、「ねらい」、「主な活動」が分かるように記載するとともに、「3つの柱」ごとに、プログラムが他学年のプログラムと「どのようにつながっているか」が分かるように系統性を示しています。

【注】

※1 VUCA

VUCA とは、変動性 (Volatility)、不確実性 (Uncertainty)、複雑性 (Complexity)、曖昧性 (Ambiguity) からできた言葉です。「変動性 (Volatility)」は、環境などが急速に変化し、予測が難しい状況を指します。「不確実性 (Uncertainty)」は、将来の出来事や結果が不確かであり、状況を正確に捉えることが難しい状況を表します。「複雑性 (Complexity)」は、多くの要因や相互作用により、問題が複雑化している状況を指します。「曖昧性 (Ambiguity)」は、情報が不明瞭で捉えにくく、判断が難しい状況を表します。VUCA は、これらの要素が互いに影響し合い、予測や調整が難しい状況を示しています。こうした時代において、適切に対応する力が求められています。

※2 OECD

OECD（経済協力開発機構）は、VUCA な時代において、様々な取組を行っています。各国に対して政策提言を行い、具体的な政策の改善や助言を行うことで、国際的なスタンダードやルールの形成を支援したり、複数の委員会をもって議論を行い、国際社会全体のための活動を行ったりしています。教育においても、統計や分析などを通じて、教育の質の向上を支援しています。そういった調査には、PISA（生徒の学習到達度調査）などがあります。これらの調査を通じて、教育の質や効果を客観的に評価し、改善に向けた施策を提案しています。それにより、VUCA な時代の中でも、課題や変化に迅速かつ適切に対応し、持続可能な形で発展することができるようになります。

※3 「わたしたちが実現したい未来 (The Future We Want)」

OECD は持続可能な未来のために、より良い提案を行い、実現に向けた取組を推進しています。これは、経済だけでなく、社会の安定や環境保護等、様々な観点から持続可能な発展を目指すためです。OECD が提唱する「The Future We Want」では、より良い未来を築くための方針や価値観を示し、国際社会全体が共通の目標に向かって協力することを促しています。その中で、ウェルビーイングの概念が示されています。

※4 CASEL

CASEL (Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning) は、学術、社会、感情的学習のための協力組織です。子供たちの社会情動的スキルを向上させることを目指しています。

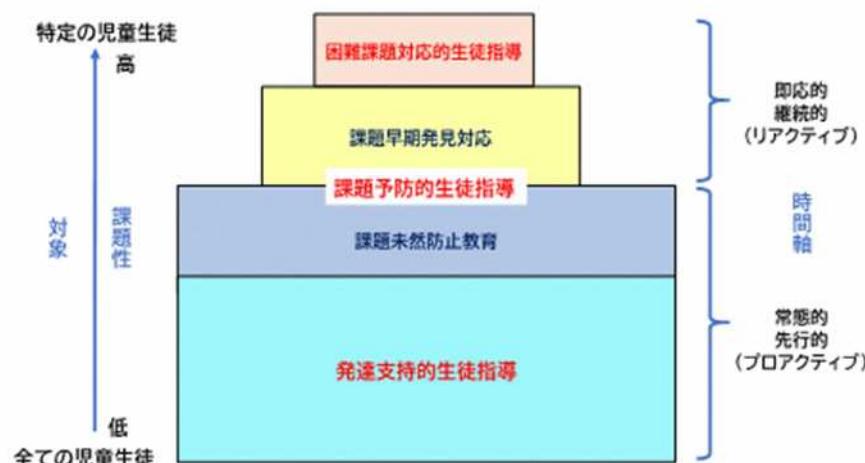
※5 生徒指導の2軸3類4層の重層的支援構造

生徒指導提要では、児童生徒の課題への対応を時間軸や対象、課題性の高低という観点から類別することで、生徒指導を下記の図のように2軸3類4層で構造化しています。

生徒指導の2軸として、児童生徒の課題への対応の時間軸に着目し、積極的な先手型の常態的・先行的（プロアクティブ）生徒指導と事後対応型の即応的・継続的（リアクティブ）生徒指導に2分しています。

生徒指導の3類として、生徒指導の課題性（「高い」・「低い」）と課題への対応の種類から分類すると、①全ての児童生徒の発達を支える「発達支持的生徒指導」、②全ての児童生徒を対象とした課題の未然防止教育と、課題の前兆行動が見られる一部の児童生徒を対象とした課題の早期発見と対応を含む「課題予防的生徒指導」、③深刻な課題を抱えている特定の児童生徒への指導・援助を行う「困難課題対応的生徒指導」に分類されます。

生徒指導の4層として、上記の2軸3類に加え、生徒指導の対象となる児童生徒の範囲から、全ての児童生徒を対象とした第1層「発達支持的生徒指導」と第2層「課題予防的生徒指導：課題未然防止教育」、一部の児童生徒を対象とした第3層「課題予防的生徒指導：課題早期発見対応」、特定の児童生徒を対象とした第4層「困難課題対応的生徒指導」から成る生徒指導の重層的支援構造で示されています。



【図5 出典：生徒指導提要（令和4年12月） 文部科学省】

※6 静岡県における教育の基本理念

本県は、人権を尊重し県民一人ひとりの幸福実感を重視する「ウェルビーイング」の視点を取り入れ、教育の基本理念を「未来を切り拓く人材の育成と社会を生き抜く力を育む教育の実現」としています。

静岡県の持続的な発展につなげ、県民が幸せを感じられる静岡県づくりを進めていくためには、未来を切り拓く多様な人材を育てていくこと、すなわち「人づくり」が基本となります。

社会が急激に変化する予測困難な時代において、静岡県が直面する課題を解決し、持続的な発展につなげていくためには、自ら課題を的確に捉えて解決につなげる能力を持ち、未来を切り拓いていくことのできる多様な人材を育てていくことが重要です。また、将来を見据えると、全ての人が持続可能な社会の担い手として、自らの個性や能力を發揮し、多様な人々と協働しながら社会や人のために行動していくことも求められています。自分の夢を実現でき、幸せを実感できる「幸福度日本一の静岡県」を目指し、全ての人の個性や能力を伸ばす教育を推進します。

【参考】

- ・文部科学省 HP 「学習指導要領 改訂に込められた思い」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm#section3
- ・「指導と評価の一体化」ための学習評価に関する参考資料(令和2年3月)」
国立教育政策研究所
- ・「生徒の Well-being (平成29年4月)」 国立教育政策研究所
- ・OECD
https://d15k2d11r6t6rl.cloudfront.net/public/users/Integrators/5eb5_5a21-9496-46ce-8161-f092fc9def23/aaie/OECD%202030%20Position%20Paper%20SUMMARY%20%2805.04.2018%29.pdf
- ・厚生労働省 HP
<https://www.mhlw.go.jp/content/11601000/000467968.pdf>
- ・OECD HP
https://www.cfcchildren.org/wp-content/uploads/research/oecd-social-and-emotional-skills-well-being-connectedness-and-success_compressed.pdf
- ・生徒指導提要(令和4年12月) 文部科学省
- ・小学校学習指導要領(平成29年告示) 文部科学省
- ・中学校学習指導要領(平成29年告示) 文部科学省
- ・静岡県教育大綱(2025年3月) 静岡県